

2012年6月2日
於 東京大学

18世紀の科学

18世紀フランスにおけるオナニー肯定論と日本のオナニー論

関谷一彦

序. グラーツでの国際18世紀学会での発表

1. 阿尾氏たちによるティソの翻訳『オナニスム』
2. 『オナニスム』における科学を装った医学
 - 1) ティソの『オナニスム』は当時のベストセラーのひとつ
 - 2) 死にまで至る病気、異常性の強調、誰もが行ってた行為だけに余計に関心を引く
 - 3) オナニーを道徳的罪として断罪するのではなく、医学的立場から病的側面の強調によってその害悪を説く。科学を偽装しているという点で今日のテーマ
 - 4) 医学的=科学的観点から体液(精液)の重視。医学的=科学的用語の使用。エロティシズムを避ける中性的な語の使用。
 - 5) 記述方法は読者の感性に訴えかける
 - 6) 実際の記述内容は経験論的、演繹的ではなく帰納的
3. オナニー肯定論
 - 1) デイドロ『ダランベールの夢』の登場人物「ボルドゥ」

« on se fait saigner dans la pléthore ; et qu'importe la nature de l'humeur surabondante, et sa couleur, et la manière de s'en délivrer ? elle est tout aussi superflue dans une de ces indispositions que dans l'autre ; et si repompée de ses réservoirs, distribuée dans toutes la machine, elle s'évacue par une autre voie plus longue, plus pénible et dangereuse, en sera-t-elle moins perdue ? La nature ne souffre rien d'inutile ; et comment serais-je coupable de l'aider, lorsqu'elle appelle mon secours par les symptômes les moins équivoques ? Ne la provoquons jamais, mais prêtons-lui la main dans l'occasion. » (Diderot, *Oeuvres complètes*, t. XVII, éditions H. Dieckman et J. Varloot, Hermann, 1987, pp. 199-200)

- 2) 『女哲学者テレーズ』の登場人物「T神父」
 - ① « la saine raison ne nous dicte-t-elle pas qu'il vaut mieux encore que nous jouissions d'un plaisir qui ne fait tort à personne, en répandant inutilement cette semence, que de la conserver dans nos vaisseaux spermatisques, non seulement avec la même inutilité, mais encore toujours aux dépens de notre santé et souvent de notre vie ? » (Thérèse

philosophe, par Florence Lotterie, Flammarion, 2007, p. 126 ; 邦訳、拙訳『女哲学者テレーズ』、人文書院、2009、p.79)。

- ② « Parlons présentement, mon enfant, de ces chatouillements excessifs que vous sentez souvent dans cette partie qui a frotté à la colonne de votre lit ; ce sont des besoins de tempérament aussi naturels que ceux de la faim et de la soif : il ne faut ni les rechercher ni les exciter ; mais dès que vous vous en sentirez vivement pressée, il n'y a nul inconvénient à vous servir de votre main, de votre doigt, pour soulager cette partie par le frottement qui lui est alors nécessaire. (...) Au reste, comme ceci, je vous le répète, est un besoin que les lois immuables de la Nature excitent en nous, c'est aussi des mains de la Nature que nous tenons le remède que je vous indique pour soulager ce besoin. Or, comme nous sommes assurés que la loi naturelle est d'institution divine, comment oserions-nous craindre d'offenser Dieu en soulageant nos besoins par des moyens qu'il a mis en nous, qui sont son ouvrage, surtout lorsque ces moyens ne troublent point l'ordre établi dans la société » (*Thérèse philosophe*, par Florence Lotterie, Flammarion, 2007, pp. 112-113 ; 邦訳、拙訳『女哲学者テレーズ』、人文書院、2009、pp.61-62)。

4. 日本のオナニーについての言説

- 1) 最初の記述、13世紀の『宇治拾遺物語』、巻一の十一
「これも今は昔、京極の源大納言雅俊といふ人おはしけり。仏事をせられけるに、仏前にて、僧に鐘を打たせて、一生不犯なるを選びて、講を行はれけるに、ある僧の、礼盤にのぼりて、すこし顔気色違ひたるやうになりて、撞木をとりて、ふりまはして、打ちもやらで、しばしばかりありければ、大納言、いかにと思はれけるほどに、やや久しくもの言はでありければ、人ども、おぼつかなく思ひけるほどに、この僧、わななきたる声にて、「かはつるみは、いかが候ふべき」と言ひたるに、諸人、顔を放ちて笑ひたるに、一人の侍ありて、「かはつるみは、いくつばかりにて候ひしぞ」と問ひたるに、この僧、首をひねりて、「きと夜べもして候ひき」と言ふに、おほかたとよみあへり。そのまぎれに、早う逃げにけりとぞ。」(『宇治拾遺物語』、『新潮日本古典集成』所収、新潮社、1985、pp.43-44)
- 2) 江戸時代、とりわけ18世紀のテキスト
 - ① 『阿奈遠可志』、オナニー賛美
「かわつるみという、男子の手の技ほど、類がなくすばらしいものは、またとないだろう。これを行なつたところで、評判にもならず、身を損なうこともなければ、また世の中の笑いものになった例もきかない。たぶんこの技は、貴い聖人が仏陀がお教えくださったにちがいないのだ。」

世に生きとし生ける人びと、煩惱の關におちこみ、心をまどわさないものは、千人に一人もいないのだが、わずかに、こぶし（拳）ひとつを上下するだけで、量りしれない罪や科を、消滅させることができるのだから、これ以上、貴い行為はないとっていいだろう」（沢田名垂著、志摩芳次郎訳注『阿奈遠可志』、大陸書房、1981、p.47）。

② 医学的視点でオナニーについて、当時の色道指南書『艶道日夜女宝記』、『医道日用重宝記』という医学書のパロディ

「夫、安味は男女共に虚損すと云ども、血気めぐらざれば、かへって病をなす也。人常に五臓の血気どうようすれば、血よくめぐるゆへに、じん水くさる事なし。淫乱女の曰く、自安味はよく心をなぐさめ、血気をめぐらすといへば、貞心をもやぶらず、はづみし開中をゆるかになすと、張かたを調和して、其なやみを治ス」（薺露庵主人『江戸の艶道を愉しむ』、三樹書房、1995、p. 11）。

③ 貝原益軒の『養生訓』

巻第四「慎色欲」

「精気を浪費し、元気をへらすのは寿命を短くするもとである。恐ろしいことである。若いときから男女の欲が、ふかくして、精気を多くへらしたひとは、生まれながらに身体が強いだらうけれども、下部の元気が少なくなり、五臓の根本（腎）が弱くなってきつと短命になるであろう。大いに慎まなければならない」（貝原益軒『養生訓』、伊藤友信訳、講談社学術文庫、1982、p.139）。

「交接の回数と年齢」

「男女の交接の周期は孫思邈の『千金方』に述べてある。それは「人、年二十の者は四日に一たび泄らす。三十の者は八日に一たび泄らす。四十の者は十六日に一たび泄らす。五十の者は二十日に一たび泄らす。六十の者は精をとじて泄らさず。もし体力さかんならば、一月に一たび泄らす。気力すぐれて盛んなる人、欲念をおさえ、こらえて、久しく泄らさざれば、臙物を生ず。六十を過ぎて欲念おこらずは、とじて泄らすべからず。若く盛んなる人も、もしよく忍んで、一月に二度もらして、欲念おこらずば、長生なるべし」というものである。

いま自分は右について考えるに、『千金方』に述べていることは一般に通用する法である」（*Ibid.*, pp. 139-140）。

④ 性愛技法の解説書である『秘事作法』

「これ、久しく易き事也。又、初法也。早ばやにかわやに入りて、先ず、下腹を軽く撫でてこすりながら、宮のさねたれを柔らかく、指にてこする可し。然れども、宮なかは湿りあるも、したたる程にもなければ、さねたれ乾きお

る故、つば丹念につけ、呼び水とする。指腹にて、両さねひらを撫でて宮内にさし込み、又、指を戻して、さねたれとさねたれうらをこする也。交互に十に一度に、さねひらより、つぼ口に当てる。凡そ百程にて、宮内に少しく騒が水出る」（薺露庵主人『江戸の艶道を愉しむ』、三樹書房、1995、pp. 125-126）。

5. 両者の違い

- 1) 自然についての考え方の違い、日本人にとって自然は人間の力を超えたものであり、支配の対象にはならない。それゆえに敬意を払い、敬うべきもの。
- 2) フランス、キリスト教文化圏では自然は人間による考察の対象、このことは、自然は人間によって管理、支配されねばならないという考えを導く。啓蒙思想がとりわけこうした考えに貢献。
- 3) 日本のテキストには罪の意識はない。宗教的、社会的観点からの批判はない。
- 4) 日本人がオナニーに罪の意識を感じ始めたのは明治になってから。西洋文化を輸入してから。現在のわれわれの性意識は江戸時代とは非常に異なる。

6. 18世紀の科学というテーマに引き寄せて

- 1) 『オナニスム』の著者ティソは医者であった。科学的思考を前提とする医学がオナニーの問題に関心を寄せたのはなぜか？ 個人の問題から社会の問題へと関心の移行。社会にとって危険。子どもの成長また優良なく種々の保存という観点から有害。性は管理しなければならない。
- 2) 性倒錯者、同性愛者は性的異常者とみなされ、正常者から区別される。「軽犯罪や取るに足らぬ猥褻行為、取り立てて言う程の事もない倒錯的行為に対して細かい裁判権を行使するようになる」（フーコー『性の歴史 I、知への意志』、新潮社、pp. 40-41）。ラブクール村の農業労働者が告発された事件（pp. 41-42）と同じ地平。
- 3) ルソーも性は管理されなければならないと考える（『エミール』）。
- 4) ディドロやT神父の考えは駆逐され、性の管理へと 19世紀が進んだ理由は何か？ 医学（のちには精神医学）と啓蒙の結び付き。啓蒙の功罪（ホルクハイマー、アドルノ『啓蒙の弁証法』）。啓蒙思想は、非合理的な思想の足かせ（宗教や道徳など）から人間の思考を自由にし、人間にとってもっとも大切な自己保存の力を目いっぱい引き出すことを許した。その一方で、啓蒙は科学を信奉し、合理的思考を貫こうとする。その結果、数量化、体系化、画一化（規格外のものを嫌う）を促す。
- 5) 科学的言説を装った性に関しては啓蒙が果たした役割は罪の方が大きいのではないか。